

季刊

ひたすらなるつながり

vol.12

2024年2月

共に生きる社会をどう創るか

表紙イラスト atelier minori

コラム〈01〉福祉論壇 待つか、動くか

社会活動家／東京大学特任教授 湯浅誠さん

特集〈02-08〉コロナ禍を経て共に生きる社会をどう創るか

特別対談 三日月 大造 滋賀県知事×

市川 忠稔 滋賀県社会福祉協議会会長

連載〈09-11〉えにしのたね えにしのめ

全ての人の居場所と出番を

一般社団法人Atlas 代表理事 日野貴博さん

新・連載〈12〉福祉の仕事大事典

キュレーター（学芸員）山田創さん

歯科衛生士 井上直美さん

連載〈13-14〉福祉の政策と生活 #02

生活支援体制整備事業

竜王町役場福祉課社会福祉係長

竜王町社会福祉協議会次長 岡司圭秀さん

NPO法人元気な仲間代表理事 谷仙一郎さん

コラム〈15〉おすすめめの映画と本

「ザ・スーパーマリオブラザーズ・ムービー」ほか

連載〈16〉県社協レポート 修学資金係

連載〈17-18〉わたしとふくしのはなし

NPO法人滋賀県盲ろうつ者友の会

理事長 岡田昌也さん／事務局長 黒川早苗さん

新・連載〈19-20〉フォーラムひたすらなるつながり

寄稿〈22〉しが福祉論壇

声をかけあい、助け合いながら

暮らせる社会へ

社会福祉法人六匠会 松川恵さん

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌

季刊 ひたすらなるつながり

2024年2月22日発行

通巻12号

発行人 市川 忠稔

〒525-0072 草津市笠山七丁目 8-138

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会



特別対談

市川 忠稔

滋賀県社会福祉協議会会長



三日月 大造

滋賀県知事

どう創るか

共に生きる社会を

コロナ禍を経て

今号の特集は、三日月大造滋賀県知事と市川忠稔滋賀県社会福祉協議会会長との対談です。

2023年11月28日、琵琶湖を臨む会場で、4年弱続いたコロナ禍が私たち滋賀県民の生活にもたらしたことは何かという視点から、二人の話は始まりました。

しかし、対談の日から約ひと月、日本中の人たちが、それぞれの幸せを願った令和6年1月1日、能登半島を激震が襲い、能登の人々のいのちと暮らし、平和な日常が災害によって奪われたのです。

今、私たち福祉関係者は、能登の人々に思いを寄せ、現地派遣による支援活動や義援金などの募金活動が続いています。どこでも起こり得る災害に備えて、本当に人が人として大事にされる地域・社会を創っていくということー「共に生きる社会をどう創るか」。リアリティをもって言葉にし、行動していきたいと思います。



社会活動家／
東京大学特任教授
湯浅 誠さん

待つか、動くか

元旦に大きな震災が起きた。
元旦、私は体調を崩して臥せていたが、所属する「むすびえ」では情報収集が始まっていた。私の参加は2日から。まず石川県の地域ネットワーク団体代表者に連絡を入れた。この時点でこども食堂の被害状況は確認できていないが、代表者は連絡の取れる奥能登のこども食堂運営者から情報収集しつつ、その時点で物資支援を受け付けている七尾市役所に物資を選び込もうとしていた。
その日の午後には、石川・小松のこども食堂運営者がすでに被災者支援に動いていることもわかった。七尾まで車移動し、被災したコンビニで生活用品を購入し、その場で周辺住民に配布するという経営支援+被災者支援だった。費用は、全国のお寺から集まる支援金を使っているとのこと。そのこども食堂はお寺の住職が運営されていた。その方にも電話した。元旦にこども食堂を開催していたとのこと。「電話で被災者支援の相談をしていたら、それを聞いていたこどもが、自分のお年玉5000円を差し出してくれた。その5000円に励まされてがんばる」とおっしゃっていた。
むすびえとしては、2日のうちに被災4県（石川、福井、富山、新潟）のネットワーク団体にお見舞金30万円を振込むことを決め、4日に現地・石川の基金を紹介、また同日にはむすびえとしてYahoo!ネット募金も立ち上げた。Yahoo!募金には、むすびえから上限500万円でマッチング寄

ふくし

福祉論壇

ろんだん

付を行う。今日段階で、2000人以上から約900万円が寄せられた。現地から必要物資を伝えてもらって、こちらでAmazonほしい物リストに打ち込んで広く物資購入支援を呼びかけることも始めた。今日はこれから石川に入る。
非常時は平時のつながりの重要性を痛感する機会というのは、被災地のご近所関係のみならず、私たちにとっても同じだ。平時から地域の団体とつながっていないむすびえメンバーは「誰かふだんからお付き合いのある人はいませんか」と団体内に呼びかけるに止まる。全員がそうだと組織は「待ち」の姿勢になってしまうだろう。本当にしんどいときは「しんどい」とも言えないのは、個人も被災者支援活動に全力投球中の団体も同じなので、非常時対応としては致命的だ。
ふだんの地域活動と非常時対応の原則は同じだ。「できる人が、できるときに、できることを」。だからだろう、ふだん地域で奮闘しているこども食堂の人たちは、知り合いがいるとかいないとかではなく、とにかく動き出す。対して、ふだん誰かの指示で動くことに慣れ、指示という「正解」を待たないと間違える、間違えてはいけない、と思いつ込んでいる人たちは待ってしまう。非常時対応とは、1時間後に支援がくるかもしれないが来ないかもしれないという不確実性の中で、今、対応を決めることだ。非常時にはその不確実性が際立つ。だが、平時だって基本的には同じだ。平時だったら未来が見通せる、などということはない。私たちは神ではない。そしてだからこそ、私たちは主人公、主体、主権者になることができる。

コロナ禍での暮らしに関する調査

2023(令和5)年10～11月にかけて、滋賀県でコロナ特例貸付を利用された方に協力いただき、10,227名を対象に質問紙調査を実施しました。

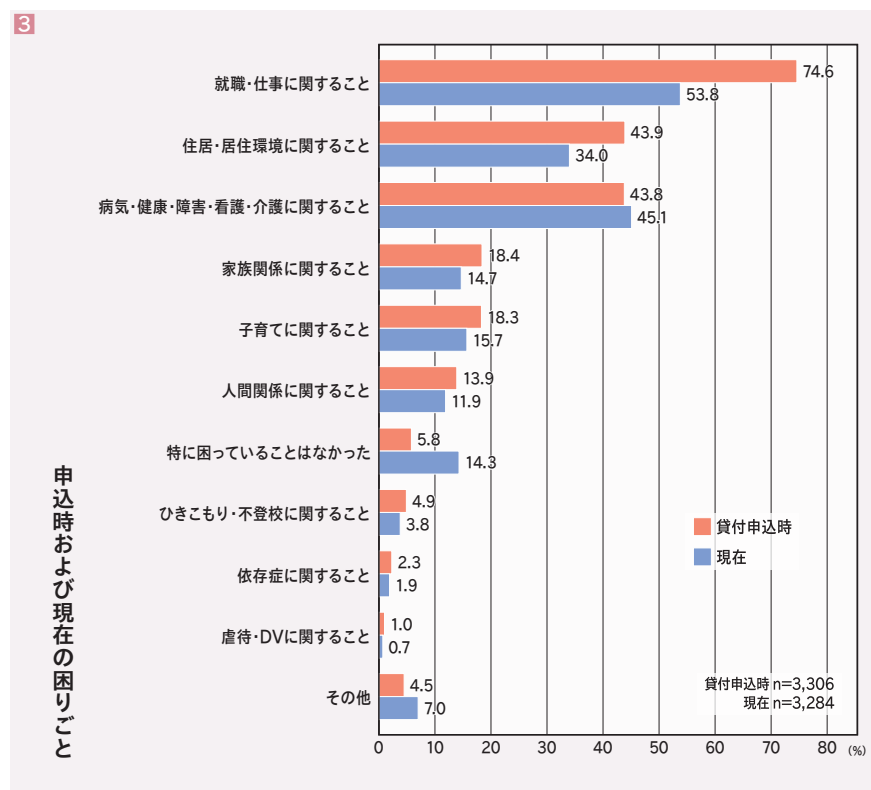
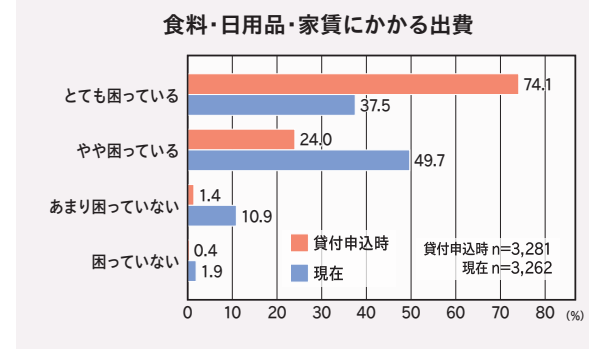
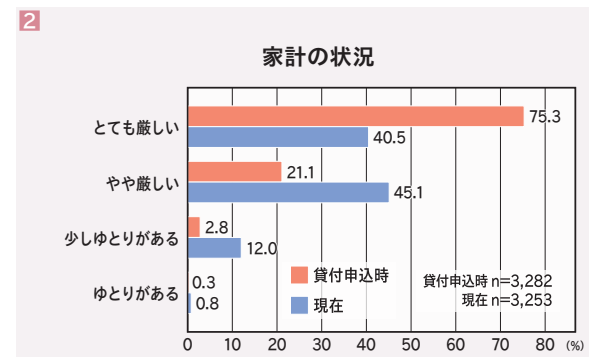
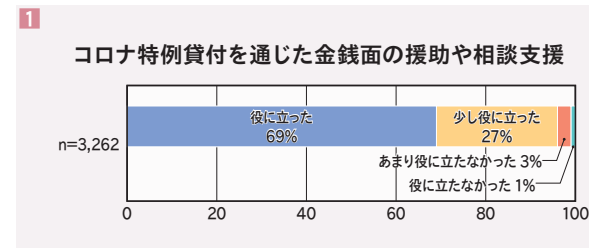
有効回収数は3,299名(有効回収率32.26%)。回答者の性別は、男性が6割、女性が4割、平均年齢は52.2歳でした。結果は分析中ですが主なものを紹介します。

1 コロナ特例貸付を通じた金銭面の援助や相談支援は95%以上が「役に立った」または「少し役に立った」と回答。

2 貸付利用時には回答者の4分の3以上が「とても厳しい」家計状況であった。現在では、大幅に減少しているが、依然として約4割が「とても厳しい」と回答。

3 貸付利用時の困りごととして「仕事に関すること」「住まいに関すること」「病気や障害、介護等に関すること」が多かった。

現在、仕事に関する困りごとは減少しているが、病気や障害、介護に関することはやや増加している。



新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、世の中は少しずつ以前の生活に戻ってきています。ただ、4年弱続いたコロナ禍で、生活困窮が顕在化し、人とのつながりが絶たれたことで孤立してしまった人たちも少なくありませんでした。今なお、困難を抱える人たちもあります。今の滋賀県が抱える福祉の課題を見つめ、公私が手を携えて希望をもてる地域・社会をどのように創っていくのか、三日月大造滋賀県知事と、市川忠稔滋賀県社会福祉協議会会長の対話が始まりました。

新型コロナウイルス収束後も困りごとは続いている

——コロナ禍によって、滋賀県でも困りごとが可視化された部分があると思います。その後の回復状況も含め、現在の状況をどのように見ておられますか。

市川 コロナ禍では、「困っている人がより困る」という現象が起こり、幅広い世代で生活困窮が顕在化しました。今は、その時に貸し付けた生活福祉資

金の償還が始まっています。滋賀県社協では、特例貸付がどのような生活の課題に対応できたか、利用者は現在どのような生活をされているか、アンケート調査をしました。すると、お金のことは改善されてきたけれど、生活の困りごとが解消されていない方が多くおられるとわかってきました。外国語での回答も多かったです。

三日月 滋賀県社協のみならず、常日頃一人ひとりに寄り添ってひたすらなるつながりをつくる取り組みをしていただいで感謝しています。この4年弱続いたコロナ禍は、まずは感染症が怖かった。それだけでなく、辛い状況にある人がより辛くなる環境をつくり出したことは、心に留めて対応しないといけない。コロナ特例貸付利用者の方々はいよいよ返済の局面に入ってきて、どう過ごしておられるのか、気になるところです。

しています。調査チーム25人12チームで、利用された世帯を回るので、訪ねていくと、金銭面以外のいろんな課題が見えてきます。就職、仕事に加え、病気や介護、子育てなど、貸付とは違う悩みも打ち明けられる。それらを、まずは市町の社協とも共有し、必要に応じて相談機関につないでいます。

三日月 フォローアップ支援はとても大事だと思います。ここから得られた声を受け止めて、必要な政策と一緒につくりたい。情報は、ぜひ共有していただきたいです。

市川 我々としては生活福祉資金を通じてアプローチしていますが、みんなで力を合わせて相談につなげれば、困りごとの解決につながるのではないかと思います。

三日月 コロナ禍に続き、ウクライナの戦禍もあり、物価が上がっていることも気がかりです。困窮している人たちは、コロナで人とのつながりが疎遠になってしまっているのではないのでしょうか。家族や周りの

支援者とのコミュニケーションが取れず、例えば認知症が進んだ方などもおられるようです。きめ細かく対応していくことが重要で、重層的な支援活動が今こそ求められているように思います。

市川 滋賀県社協のフォローアップ支援は、セーフティネットの役割を一定果たしていると思います。あくまで私たちの仕事のなかで、できることを一杯やっているにとどまります。重層的支援のためには、さまざまな機関が協力して皆で支えなければなりません。

公私の役割分担でなく「のりしろ」を広げる

——共に生きる社会を創るためには、公私連携が重要なポイントです。滋賀の福祉として、行政と民間が共有できるビジョンはどういうものでしょうか。それぞれの責任や強み、連携をどう描いておられるのか教えてください。

市川 公私連携の捉え方はさまざまだと思いますが、公私が役割分担をするのではなく、い

ろいろな支援が重なって、「のりしろ」をつくっていくことが大事です。役割分担をすると、それぞれが「私たちはここをやる」となり、どうしても隙間ができてしまう。

三日月 強く共感します。縁やつながりをたくさん持つている人はいいけれど、そうでない人も包摂したい。「のりしろ」の概念は重要です。

市川 県社協が呼びかけて進めてきた「滋賀の縁創造実践センター」の実践は、まさに公私連携で隙間を生まない取り組みでした。子どもの笑顔はぐくみプロジェクトも、ひきこもり支援も児童養護施設の子どものサポーターも、隙間が生じやすいところに皆で知恵を出し合って、連携して実践をつくっていました。公も私も、検討段階から一緒にやっていく枠組みだったと思うのです。

三日月 そうですね。縁センターができたのは、私がちょうど知事になった時でした。例えば、子ども食堂の取り組みでは、最初は子どものための食堂だ

と思っていたら、実はいろんな世代のつながりをつくれる居場所になっていったことなどは、大変印象的でした。

市川 今は、縁センターが滋賀県社協そのものになり、ひたすらなるつながりの実践に取り組んでいます。もう一度原点に帰って、公私連携の意味を問い直し、さまざまな取り組みが重なり合うことの大切さを広めていきたいと思っています。

外国人としてではなく 一人の県民として

—— 私たちの身近なところでも、外国にルーツのある方々が社会を支えておられます。そういった方々と地域とのつながりの状況はいかがでしょうか。

三日月 滋賀県民はつながりを大事にしています。ただ、外国籍の子どもたちなど、つながりの網にかからない人たちもあるので、絶えず見落とさないように取り組まなくてはならない。制度がなければつくっていく、糸賀一雄さんの「自覚者が責任者」という理念を、大事にしてい

きたいです。

市川 少し前に、ブラジル人の子どもたちの育ちや学びを支援しておられる方から「高齢者」「障害者」などの枠組みと同様に「外国人」を捉えないで、という問題提起をされたことがありました。「高齢者と外国人は別々ではなく、高齢者の中にも外国人がいる」というご指摘でした。「外国人」というカテゴリーだけで見ないでほしい、というメッセージですね。

三日月 昨今、人手不足を補うために外国人の雇用を増やす流れがありますが、忘れてはならないのは、その人たちの日々の暮らしです。当然いろんな事情を抱え、いろんな家族がおられる。「外国人」と見るよりも、「働く人」「シニア世代」「子どもたち」の中に、多様な人たちがいる。その人たちが過ごしやすい環境をつくる。こういう視点が大事なのでしょう。

市川 そうですね。介護現場でも、外国人の方が当たり前前に働き、チームの一員になっていますから。

三日月 医療も教育も、同じ仲間としていろんな制度を整えていくことが重要です。まだまだ足りないこともあるけれど、共に過ごしやすい環境をつくっていききたいと思います。

「助けて」と言える 地域をつくるためには

—— 滋賀県ならではの課題があるとすれば、どのようなことでしょうか。

三日月 山々と琵琶湖、そして日本を代表する製造業の生産拠点があり、滋賀県は豊かな地域です。ただ、豊かさの中にも、暮らしの困りごとや生きづらさはあるでしょう。それらをみんなが素直に出せる、弱さを共有できるような地域にしていこう。この必要性を感じています。

市川 豊かな人が多い滋賀県だからこそ、逆に困っている人が声をあげにくい、ということが考えられるのではないのでしょうか。

三日月 「モデル世帯」が多すぎて、豊かな暮らしが前提になり過ぎて、豊かでない面があります。「こうでなければならぬ感」が

蔓延し、そこから漏れる人たちが、「困っている」と言いづらい。

例えば、集落のまとまりが良すぎると、そこに収まらない人たちは居づらくなる。「働きにいかないあかんやないか」「行事に参加せんと」というムードになっ

てしまいがちです。ベースは優しく豊かな人たちなので、こぼれる人たちへの少しの寛容さや思いやり、慈しみ、そういうものも同時に持ち合わせる

滋賀県でありたいと思います。

市川 周りの多くの人と比べて生活が厳しい「相対的貧困」の状況にあると、少数派になっ

てしまつて声をあげにくい、という

こともあるかもしれません。

三日月 学校現場などで「わかった」「できた」が大事にされすぎると、「わからない」「助けてほしい」と言えなくなる空気も似ている気がします。社会も同じです。とかく「強さ」や「良さ」が強調される時代ですが、苦しい状態にある人が「苦しい」と言いやすい環境が大事です。ただ、滋賀県には、その土壌があり、察知する感性もあります。

市川 感性の豊かな人は多いですね。レイカディア大学に通う高齢者の皆さんは、生活に一定のゆとりもあり、ボランティア活動などに積極的な方が多いです。今平均70歳を超え

ましたが、皆さん、いろんな地域の活動をされている。ちょっとした手助けができると、それも社会での働きにつながるのではないのでしょうか。

三日月 それは心強いです。人づくりや、人と人をつなぐネットワークづくり、その人たちが能力を高める機会づくりを、県社協の皆さんと一緒に展開していけたらいいと思います。

シニア世代が 地域の大きな力になる

市川 レイカディア大学の卒業生は6千人にのぼります。また、新たにシニア世代向けの「SLEC（エスレック）」友活講座（※）がスタートしました。キャッチフレーズは、「ともに学ばん、ともに遊ばん、ともに生きなん」です。卒業生の方や、レ

Siga Lakadia Extention Center

* SLECとは？

しがレイカディア
エクステンションセンター

SLECとは「ともに学ばん」「ともに遊ばん」「ともに生きなん」をコンセプトに、多様性のある自分磨きと社会貢献活動の新たなライフスタイルを提案するものであり、その具体化のために居場所活動、友活講座を実施しています。



① 私たちの居場所 「ベース友活」

参加者が主役となって、自由に語り合う新たな居場所をコージータウン（COZY TOWN）にて月2回開催しています。



② 学びと趣味をひろげる自分磨き 「SLEC友活講座」

「プロに学ぶ家庭料理ステップアップ講座」の様子。教養（今日用）、教育（今日行く）を楽しむワークショップなどの短期講座を開催しています。

Disaster Welfare Assistance Team

能登半島地震でしがDWAT初めての支援活動



被災地に派遣されたしがDWATの第1クルールのメンバーが三日月知事に現地での活動を報告し、滋賀県での災害に備えて、福祉的支援体制のあり方について知事に提案しました。



しがDWATのチーム員は当初、1.5次避難所で活動し、現在は志賀町に入っています。次々フェーズが変わる中、現地の方に寄り添い、求められている役割を果たしています。

DWATとは？

災害派遣福祉チーム(ディーワット)

Disaster(災害) Welfare(福祉) Assistance(支援) Team(チーム)

災害時において、一般避難所等で災害時要配慮者(高齢者や障害者、子ども等)に対する福祉的支援を行うことを目的として、福祉専門職等で構成するチームのことです。長期避難者の生活機能の低下や要介護度の重度化など二次被害防止のため、必要な支援をします。滋賀県では2020年度に発足、能登半島地震の避難所で初めて支援活動をしました。



イカディア大学生、この他にも学びに関心のある人などを対象にしています。10月からスタートしましたが、すぐに定員が埋まってしまいました。男性が多いですね。

三日月 いいですね。ゆくゆくは「ともに働かん」という概念も入ってくれば、さらに滋賀県が豊かになりそうです。

市川 学びの内容は、コーヒーのいれ方から、家庭介護まで。NPOをつくったり、学校へ出かけて子どもたちのサポートをしたり、地域で活躍するきっかけになると思っています。そんな中で、介護のことをちょっとやってみるきっかけにもなるかもしれません。学んだ人たちがいろいろな形で困っている人たちにアプローチしてくだされば、良い滋賀県がつくれるんじゃないかなと思っています。

三日月 意欲のある人がたくさんおられるんですね。退職後、地域社会づくりに参画するためのリスクリングをサポートし、皆さんが持っている力を生

かしてできる働きをしようと、滋賀県としても呼びかけていきます。その中核に、レイカディア大学やS L E Cがあるように思います。滋賀ならではの緩やかな福祉人材を育成するきっかけになるでしょう。

市川 そうなるといいですね。介護に関して言えば、介護福祉士やプロの人は当然必要ですが、少し助けがあるだけで、安心感は全然違ってきます。

三日月 ちよっとした困りごととに手を差し伸べてくれる人の数が多いか少ないかによって、地域の生きやすさは変わってくるでしょう。そのための人づくりを、もちろん滋賀県も頑張ります。困りごとを助けるためのスキルが身につくような講座などがあつていいかもしれません。

福祉の充実こそ豊かな滋賀をつくる近道に

——滋賀県で暮らす人たちや、福祉に携わっている「滋賀の福祉人」に伝えたいメッセージはありますか。

三日月 「福祉」というと、負担

聞きます。企業で働く人にも共通の悩みですよ。福祉を充実させることが経済を活性化させ、会社や地域に、働く人が集まってくる、ということを広く発信していきたいですね。

市川 福祉人材が不足していると言われていた点では、樂觀してはいけません。明るい未来も感じています。滋賀県には「福祉人」がたくさんおられます。それはきっと、糸賀先生以来、地域の福祉を担ってきた人たちが脈々と、大事なことをつないでこられたからでしょう。

次世代の人たちをどう育てるかという視点は必要ですが、これまで活躍してきた福祉人のことを、若い人に丁寧に伝えていくことにも力を入れたいと思っています。県社協の研修の中にも、糸賀先生や先人について学べるプログラムを盛り込んでいきたいです。

三日月 歴史に学ぶことは、とても大事ですね。私から福祉人の皆さんへのエールとしては、自身も心がけていることですが、「せっかく滋賀で一緒に

につながるかのようなイメージをもつ人もあるけれど、実はそうではありません。福祉と地域や経済は、切り離せるものではないのです。福祉に取り組むことが、経済活性化の近道になることもあります。安心して老いていける。安心して暮らしていける。病を持っていても働ける。そういう環境をつくること、新たな発想につながり、豊かなものづくりにもつながっていくと思います。

市川 介護離職の話をよく聞きますが、滋賀県は企業で働く人が多く、身近な問題だと思います。そういった視点があると、福祉にも目が向くかもしれません。会社で働く人も、みんな心の中では離れている家族のことなどを心配されているのではないのでしょうか。老いていく親のことが気がかりな人もあるでしょう。

三日月 単身赴任していて、親の介護で遠くまで帰っている、あるいは、見守りのシステムを入れている、病院が入院させてくれなくて困るといった声も

生きているので、老いていくこと、病と付き合うこと、旅立っていくことに寄り添える滋賀県をつくろう」ということです。ありのままの生老病死を、一緒に包み込んでいける地域にしたいのです。

福祉の仕事をしたり、専門資格を持っていたりする方は、そのエキスパートとして大事な存在です。働きがいを感じられ、スキルやモチベーションをあげられるようなさまざまな施策を、滋賀県社協とともにつくっていきたいと思います。ぜひこれから一緒に頑張りたいです。





学習会に参加する子は、それぞれ「今日はこうやって過ごしたい」というイメージを持って来ます。それを少しでも叶えられる体制づくりをしていました。対象を限らず「自称若者」も含めて誰でも来られる居場所を——という思いで活動の幅を広げたのは、2017年です。駅前から拠点を移し、学習支援に加えてフリースペース（若者の居場所）を始めました。「生活困窮家庭の学習生活支援だけでは、参加できる人が限定されていました。家で暴力を受けていても両親がそろっていたら来られないのです。また自分だけ特別扱いされてステイグマを感じる子も多く『対象家庭ではない友達と一緒に来られそう』という子もいました」

スクールソーシャルワーカー（SSW）でもあった日野さんは、学校で、貧困家庭じゃなくても生きることに困っている子たちとたくさん出会ってきました。

専門性のあるスタッフ中心
元当事者も加わり両輪に

「柔軟に受け入れられる活動が必要でした」

2018年、アトラスは法人化します。事業が増え、就学前の子や小学生も来やすくなったことで、お母さんのレスパイト（※1）的な効果も生むようになりました。今、力を入れているのは、同じ趣味の人が集う「Maniクラ（マニクラ）」です。「部活動のイメージですね。人とつながることが難しく、人への不信任や社会への絶望感を抱え、現象として不登校になったり、別室登校になったりする子が多い。表情の暗い子たちが、自分の好きなことを話す時だけのすごい笑顔になる。好きなことなら誰かと出会え、一歩家から出られる子がいる。ポケモンカード、ガンダム、ジョジョ、デイズニーなどのサークルがあり、毎月第2日曜の午後に2サークルずつ活動します」。趣味でもつながれない状態の子たちには、家庭訪問などでアウトリーチ（※2）もしています。

2022年には栗東市で活動していた団体と合流し、今年度から草津市の若者を対象とする事業も受託しています。高校生以上が対象で、高校を中退した子や通信制高校に通う子たちが中心です。窓口の相談員が面談したり、家庭訪問したりする中で、1対1の関係だけでなく、集団に慣れる機会を持つため、居場所をつくるという試みです。

元々学生ボランティアが多かったアトラスですが、今はSSWなど専門性のあるスタッフを中心です。「専門性をもって関わったりつないだりしないと対応が難しい子たちを受け入れてやってきたんだな、とあらためて思います」。さらに近年は、元当事者もスタッフとして加わっています。「恩返し気持ちと、ちょっとかっこつきたい気持ちで、揺れながらも関わってくれている」と言い、ソーシャルワーカーなど専門職と元当事者スタッフが両輪になっています。

注釈はまとめて次ページへ

全ての人に居場所と出番を

一般社団法人 Atlas 代表理事 日野 貴博さん



困難を抱える子どもや若者たちを支えようと、主に守山市で居場所づくりなどの活動に取り組んでいる一般社団法人Atlas（アトラス）。「貧困家庭の子どもたちのために」という思いで大学の学内サークルから始まった活動は、対象や領域を広げ、多くの子どもや若者たちの笑顔を生んでいます。



福祉現場の気づきから実践へ

現行の制度で解決できない生活課題、地域の福祉課題に気づいた「滋賀の福祉人」たちが、課題解決に向けて実践しているさまざまな取り組みをご紹介します。

たね
学習支援だけにとどまらない
家のしんどさを忘れられる場所

アトラスが誕生したのは、2007年。滋賀医科大学の学生だった初代代表が、貧困の連鎖を食い止めるため、大津市職員と一緒に中学3年生を対象とした学習会を企画したのが活動の始まりです。最初は、大学の学内サークルの形でした。

現代表の日野貴博さんがアトラスに参加したのは、立命館大学4年生だった2011年。教職課程で教育社会学や教育心理学を学ぶうち、公教育の中でこぼれてしまう子どもたちに心を寄せるようになり「学校以外で子どもの力を伸ばす活動がしたい」と、アトラスに加わりました。

学習会では、参加する子どもたちの様子に衝撃を受けました。「勉強ができないだけでなく、家族の暴力などがあって帰りがたらない子も。家が居心地のいい場所じゃない子がこんなにいるんだ」と。その存在を知った日野さんは、後には引けない気持ちになりました。「糸賀一雄さんの

『自覚者が責任者』という言葉に共感しました」

2012年1月、医師を目指す前代表からバトンを受け継ぎ、同時期に、守山市の学習支援事業のボランティアも始めました。事業の対象は、生活保護家庭と一人親家庭の子たち。初年度は中学生だけでしたが「高校を卒業するまでは関わり続けたい」と思うようになりました。

学習支援の形で始まった事業でしたが、日野さんは「もっと全体的な支援が必要だな」と感じていました。全く話さないのに毎週足を運ぶ子がいると「彼は何を求めているのか」と、スタッフと真剣に話し合いました。「精神疾患のある母と兄が毎日けんかする家庭の子が、息抜きに来る。この場所は、勉強どころではない家のことを少しでも忘れられる場所だったり、明日頑張る学校に行くためのエネルギーを蓄える場所だったりするのだと気がきました」

福祉の仕事大事典

第11号の特集でご好評いただいた「福祉の仕事大事典」。
今号からは、福祉にまつわる仕事を毎号2職種ずつ連載としてご紹介します。

歯科衛生士



井上 直美さん

医療法人白桜会 小金沢歯科診療所

①「手に職を」という考えで歯科衛生士になりましたが、子育てで仕事を離れ、50歳で一般歯科に復帰しました。60歳の節目を迎え、この先の人生何ができるかと考えていた時、小金澤一美理事長と出会い、法人が運営するデイサービスやグループホームを見学しました。歯科医療だけではなく介護や福祉の支援もしており、看護師・栄養士・介護職員などさまざまな職種の方が働いていることに刺激を受け、メンバーになりたい、と入職しました。

②自宅で介護を受けている方や車いすの方など、歯科医院に通うことができない方に訪問診療をしています。コンパクトなポータブル機器をかばんに詰め込み、自宅や老人ホームなどの施設に歯科医師とともにケアに向きます。虫歯治療などの一般的な歯の治療だけではなく、口腔体操や嚥下訓練も行っています。まだまだ少数ですが、少しずつ訪問歯科は増えています。

③身体が不自由な方や障害のある方はずっと同じ場所にいて人と出会うことも少ないので、私たちの訪問をとっても喜んでくれ、やりがいを感じています。その方が何を一番望んでいるかを探り出すために「歯を治療するだけではなく人を見ること」を意識して仕事をしています。もちろん大変なこともあります。楽しいという気持ちが勝っています。今支援が必要な方も、私にとっては人生の大先輩。その方々の尊厳を大切に守りながら接していきたいと思っています。



「えんがわサロン」などの地域活動も行う。

キュレーター (学芸員)



滋賀県立美術館 山田 創さん

①昔から美術に興味があり、大学では美学^(※1)を勉強しました。海外のアール・ブリュットに関心を抱き、滋賀県で開催されていたアール・ブリュットの展覧会を見て感動を覚え、同展を主催した社会福祉法人に就職^(※2)。そこで仕事としては初めて福祉に関わりましたが、福祉的話がしやすい家庭で育ったこともあり、自分の中で福祉との関わりは以前からあったように感じます。

※1…自然や芸術における美的な感性的認識や、芸術の創造・享受などについて研究する学問 / ※2…退職後、滋賀県立美術館に就職

②キュレーター(学芸員)にはさまざまな仕事があり、展覧会の企画や収蔵する作品の管理などを行います。私のように美術と福祉をまたぐ専門性を持つケースは特殊ですが、福祉面で2つの役割があると思います。1つは障害のある方の魅力的な作品を広く社会に届ける役割。実際に福祉施設に出向いて調査し、ときには展覧会への出品につなげます。2つめは、福祉的ニーズがある方とアートの場を結びつける役割。美術館に来づらい方に、どうしたら身近に感じられるかをヒアリングし、ニーズを踏まえた展示会を開催することにも取り組んでいます。

③障害のある方で、人知れずものすごいものをつくっていることがあります。そういう表現に迫ることができるのは、大きな魅力です。また今まで美術館に来るチャンスがなかった福祉的ニーズがある方と美術館との橋渡しができることも喜びです。美術館は高尚なイメージが強いですが、本来開かれている場所であるべきです。障害の有無に関わらず、誰もが楽しめる美術館をつくっていきたいです。



展示の高さについて話し合いながら決定している様子。

①福祉に関わるきっかけ ②現在の仕事内容 ③仕事のやりがい



失敗したり、立ち止まったり
その揺らぎを共にしたい

活動の幅は広がっていますが、通底するのは「目の前の1人から始める」ことです。Maniクラの活動も「誰かとガンダムの話がしたい」1人のために始まりました。

アトラスが目指すのは「全ての人が居場所と出番を感じられる社会をつくる」こと。その居場所と出番は「その子を感じる」のが大事なポイントです。「本場に居場所になっていないか、用意されたものになっていないか」と常に問うことを忘れません。「居場所を『つくる』よりも、居場所と『感じられる』の方が、しっくりきます」

数値的な目標は、自殺率を減らすことです。「問題がないように見えても、誰にも言えず『死にたい』と思って、行動に移せてしまう子がいることを実感している」という日野さん。子どもや若者の自殺予防を掲げて対象を限定せず、複数のアプローチを組み合わせることも考えています。

「アトラスのマンパワーでは、全てを防ぐのは無理だとしても、たまたま出会った1人の命は守れるかもしれない。『絶望だらけだけど生きてよかった』と思える人を、少しでも増やしたいですね」

アトラスは、思い切り笑えて、しんどい何かをひとときでも忘れられる場所であろうと、心がけてきました。「いろんな役割を演じている子たちが、解放されて、今の自分を大事にできるように、ただ共にいる。中学・高校の自我が揺らぐ時期は、勉強やスポーツなど何かができないと存在しづらいいけないと思ってしまう。そうじゃなくて『何もできなくてもいい』と感じてもらえたら」

「アトラスは、思い切り笑えて、しんどい何かをひとときでも忘れられる場所であろうと、心がけてきました。『いろんな役割を演じている子たちが、解放されて、今の自分を大事にできるように、ただ共にいる。中学・高校の自我が揺らぐ時期は、勉強やスポーツなど何かができないと存在しづらいいけないと思ってしまう。そうじゃなくて『何もできなくてもいい』と感じてもらえたら」

〔注釈〕

※1…レスパイト

「休息」「息抜き」の意。家族等の看護や介護、ケアをしている人の休養を目的としたサービスや活動

※2…アウトリーチ
積極的に支援の必要な人へ手を伸ばすこと

Atlas内観。多くの子ども・若者の笑顔を生む場所となっている



現在日本では少子高齢化が進行しており、2025年には団塊の世代が75歳(後期高齢者)に突入するため、国内の医療や介護需要が大幅に増加すると考えられています。この状況に対して厚生労働省は、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で暮らし続け、自分らしく尊厳を保った生活を送れるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制として「地域包括ケアシステムの構築」を推進しています。「地域包括ケアシステム」には、医療と介護の連携や地域包括支援センターの設置などさまざまな取り組みが含まれますが、その柱の一つが「生活支援体制整備事業」です。

支援体制イメージ



※小地域福祉活動、地域包括ケアの関連を示すため、筆者が一部独自に定義

福祉の政策と生活

Social welfare policy and life

事業の概要と取り組みについて

図司 圭秀

竜王町役場福祉課社会福祉係長／竜王町社会福祉協議会次長

生活支援体制整備事業は、今後進展する高齢化の中で、高齢者の生活の困りごとを支えるための体制づくりを目的とした事業です。誤解を恐れず、端的に言いますと「自助」と「共助」の開発・コーディネートを行う事業です。ここで言う「自助」はセルフケアや市場サービスの購入等、「共助」は地域住民同士の支え合いやボランティア活動等を指します。

生活支援体制整備事業では、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)が、地域の活動者をメンバーとした協議体を組織し、生活課題の解決に取り組みます。そして、生活支援コーディネーターは、協議体の仲間とともに地域課題の分析やニーズと社会資源のマッチング、不足するサービスの開発等を通して、地域課題の解決にのぞみます。

私は現在、自治体域(町域)にあたる第1層の生活支援コーディネーターを兼務しています。私がフィールドとしている竜王町は、人口1.2万人弱の小規模自治体で、町域(第1層)で取り組むべき課題として、日頃の個別ケースから直接的に聞いた声や、行政が実施したアンケート調査等から、移動・交通を最優先事項としています。

その中で、福祉有償運送を実施しているNPO団体の運営支援をはじめ、デマンド型交通の維持、配食サービスの運営等を各担当とともに取り組んでいます。また、支え合いの基礎単位である自治会域にあたる第3層での見守り、支え合いを個別事例に合わせて、社会福祉協議会のワーカー、民生委員児童委員、地域包括支援センターの専門職等とともに進めています。

例えば、一人暮らしの高齢者が、ごみを出すことが難しくなってきた場合、まず難しくなってきた要因をアセスメントします。ごみ収集場まで運ぶのが難しいことが要因であれば、台車を使って本人に運んでもらう等の自助、近所の知り合いに自分のごみと一緒に捨ててもらえるよう依頼する等の共助の組み合わせを本人や関係者とともに考えていきます。生活支援体制整備事業は、個別相談、地域づくり、ニーズの把握、資源の開発・コーディネート、政策立案・調整等の一体的かつ包括的な事業であると言えます。

最後になりますが、この事業は、介護保険を財源としていますが、決して介護保険サービスを代替するものではありません。自助、共助、公助のそれぞれの選択肢を準備し、本人がいつまでも住み慣れた地域で暮らすための自己決定を支えるものであると考えています。



生活支援サービスを提供する団体から見える、地域住民の現状や課題や今後の展望

NPO法人元気な仲間 代表理事 谷 仙一郎さん

私が子どもだった昭和の時代は、近所のつながりが深く、しょうゆを貸し借りしたり、おすそ分けを届けたり、近所づきあいが普通に行われていました。子どもは勝手にお隣さんの家で遊んだり、縁側は履物をはいたまま近所の人と語らう交流の場でした。ところが、

現在は隣の住民の名前も知らないなど近隣への関心も薄れ、地域のつながりは徐々に希薄化しています。この一度失った地域のつながりを回復していくことこそが現代の地域づくりではないかと思っています。介護保険がはじまって20年以上が過ぎ、家族だけで難しくなった介護の社会化は進んできました。しかし、高齢者人口は増える一方、支え手となる現役世代は減少していく日本の世の中では、介護保険の担い手のヘルパーさんも不足していつています。このままいくと、ヘルパーに来てほしくても人手不足で来てもらえないことなどが増えていくのは容易に予想できます。誰もが住み慣れた地域で、その人らしく最期まで生活し続けられる地域を考えると、社会参加による介護予防の考え方であったり、住民の互助による生活支援

等の活動が重要になってくるのではないのでしょうか。私たちNPO法人元気な仲間でも、そんな地域のつながりを深め、行政に頼るだけでなく、住民同士の助け合いのある、あたたかいまちになればという思いで、有償ボランティアという形により、住民同士の支え合いの活動『たすけあい高島』を2009(平成21)年から始めています。また『さまざまな人が支え合うお互いさまの地域づくり推進事業』に取り組みさせていただいたことから、県内各市町を回らせていただいても、集いの場であったり、支え合いの活動であったり、住民が主体となって動き始めている事例も多く見られます。このような住民の取り組みの担い手の方にお話をお聞きすると、楽しみながら活動されたり、自分に役割があることを喜ばれたり、人とながれるこ

とを求めたりされてきました。ご自身の健康や介護予防にもつながっているようです。国が実施する調査などでも、社会参加活動を始めた理由は、どの年代でも「社会や人の役に立ちたいと思ったから」と答えておられる方が多いようです。何かきっかけがあれば動き出せる地域住民も多いのではないのでしょうか。この生活支援の担い手になることで自身の介護予防に取り組める活動が、地域に増えていくことが地域づくりに求められることではないかと思っています。

現在、生活支援コーディネーターを中心に生活支援体制整備事業が進められています。今ある取り組みを知り、つなげ、広げ、さらには必要な新たな活動をつくり、現代に合わせた「地域」のあるべき姿を引き出していくように取り組んでいきたいと思います。

県社協レポート

滋賀県社会福祉協議会では「ひたすらつながり」の理念のもと、福祉関係者や地域のみなさんとともに、さまざまな事業を実施しています。このコーナーでは本会の取り組みや職員の思いを紹介します。

(レポーター：修学・生活資金課 文野 真理子)



進捗会議の様子

児童養護施設等を退所した
若者たちの新たな一歩を
応援しています

修学資金係

滋賀県では、約300名の子どもたちがさまざまな事情から親元で暮らすことができず、児童養護施設や里親等の社会的養護のもとで暮らしています。彼らは18歳を迎えると原則として施設退所または委託解除となり、巣立ちを迎えます。

滋賀県社協では、県内の施設等を退所した若者たちの新生活を経済面で支援することを目的として自立支援資金貸付事業を実施しています。これは国の制度で、退所後の生活費や家賃、資格取得にかかる資金を貸し付け、就職後一定期間の就労継続をもって貸付金の返還が免除となります。施行された2017(平成29)年以降、滋賀県では実に80名を超える若者に利用されています。

貸付申請時の面談は、生活基盤となるお金のやりくりや将来の夢、見通しについて若者自身が確認する貴重な機会でもあります。「毎月の生活には、こんなにお金がかかるんや…」「バイトして貯金する予定です」など、さまざまな声を聴きます。また、この場には若者と本事業貸付担当だけでなく、施設等で今まで自立への土台づくりを支えてきた施設職員、そして今後若者と地域の架け橋となるつながり若者センター職員が同席し、これまでとこれからをつなぐ連携のもと、新たな生活のスタートを見守ります。

就職後の就労状況報告など貸付を利用した若者との定期、不定期のやりとりは、長ければ10年近くにわたる場合もあり、その中での「就職が決まりました」「夢だった資格試験に合格しました」「勤務先の社長が、まるで実の親のように自分を大事にしてくれる」等うれしい報告は、職員の喜びにもつながっています。また、時には困りごとが判明することもあります。食料支援やつながり若者センターのサポートにより、事態の深刻化を防ぐよう心がけています。

資金貸付をひとつのきっかけとして、若者が多様な大人とのつながりを持ちながら社会的自立に向けて自分の道を歩むことができるよう、応援しています。



Recommended Movies & Books

おすすめの映画と本



ザ・スーパーマリオブラザーズ・ムービー

△あらすじ▽

“スーパーマリオブラザーズ”は80年代にゲームとして発売され、以降多くの人に愛されています。劇中には誰もがクッスとするキャラクターや音楽がいくつも出てきて、子どもも大人も楽しめる内容となっています。本作では、マリオとルイージはブルックリンに暮らす現実世界の人として登場します。

弟思いのマリオと気の弱いルイージの双子の兄弟で水道配管工事会社“スーパーマリオブラザーズ”を営み始めました。現実世界では仕事もうまいかず、家族・親族からは慰められたり馬鹿にされたり。そんなある日、ブルックリンの街を脅かす水道トラブルが発生し、会社の名前を売るチャンスだと配管の入り組んだ街の地下道に潜り込んだところ、ひょんなことからマリオはピーチ姫のいるキノコ王国に、ルイージはクッパの支配下のダークランドにワープして…。

誰もが“スーパー”な自分になれる可能性や、身近な人からも自分からも“認められる自分”を見つける喜びを感じることができる作品です。



「ザ・スーパーマリオブラザーズ・ムービー」
4K Ultra HD+ブルーレイ: 7,260 円(税込)
ブルーレイ+DVD: 5,280 円(税込)
発売元: NBCユニバーサル・エンターテイメント



ばっちゃん

～子どもたちの居場所。広島のマザー・テレサ～

著者：伊集院 要 / 出版社：扶桑社

<あらすじ>

40年にわたって自宅を開放し、子どもたちを受け止め続けた「ばっちゃん」こと中本忠子さん。中本さんにだけ心を開き「ばっちゃん」と呼び慕う子どもたち。中本さんと子どもたちのやりとりや変化を通して「子どもたちの居場所」について考える。



「なぜ子どもたちが非行に走るのか?」という問いに、ばっちゃんは「空腹だから」と答えます。一見そんな単純なことではないのでは…と思ってしまいそうですが、「ごはん」を通じた中本さんと子どもたちとのやりとりのなかで、その答えが次第に腑に落ちていきます。「ばっちゃんは、普通の人ならほおっておく僕を、一人の人間つかうか一人の子どものように見てくれた」—ある少年の手紙に込められた思い。ありのままの姿で子どもや若者たちと日々を重ねる中本さんの姿に、大切なことに気づかされます。



障害があっても同じ人間や

～雇用から福祉へ 共に働き、共に生きた半世紀～

著者：浅居 茂 / 出版社：文理閣

<あらすじ>

町工場からスタートし、身体・知的・精神障害のある人と、共に働き自立していきいき暮らせるよう、さまざまな先駆的な取り組みを実践し「あすなろ福祉会」を先導してきた著者の半世紀にわたる歩みを振り返る。



本書では、「働く」ことで福祉に携わり、共生社会づくりを実践してきた筆者の半生が記されています。筆者は障害があろうがなかろうが、誰もが同じ人間であるという人生観を持っています。「子ども食堂」についても同じです。筆者が運営する子ども食堂では、子どももできることを自分でやります。障害があってもなくても、まずそれぞれができることをやる。そして足りない部分をどう助けてもらうかを考える。支援する側の姿勢、スタンスを改めて学んだ1冊です。

わたし はふくしの はなし

福祉に関わる方が

どのような想いを持っているのか。

このコーナーでは、普段なかなか

聞けない声、届かない声に

焦点を当て、さまざまな立場から

福祉に関わられている方の

想いを伝えていきます。

今号は、視覚と聴覚の両方に障害がある

盲ろう者の支援や交流を目的とした

しが盲ろう者友の会の事務局長である

黒川早苗さんとご自身も盲ろう者で、

しが盲ろう者友の会の理事長を務める

岡田昌也さんにインタビューしました。

盲ろう者とは...

目と耳の両方に障害のある人のことを、盲ろう者と言います。法的には「聴覚障害」および「視覚障害」が個別に規定されているにすぎず、盲ろう者に関する明確な定義はありません。現在、盲ろう者は全国で約1万4千人、滋賀県下にはその約1%の130名前後がいると推定されています。

盲ろう者は、障害の特性上、「コミュニケーション」「移動」「情報入手」の主に3つの困難を抱えていると言われます。テレビやラジオを楽しむことも、自由に買い物に行くこともひとりではできません。盲ろう者は障害の特性に応じた特別の福祉サービスの提供を必要としています。



手話の動きを触って読み取る触読手話（触手話）で盲ろう者とコミュニケーションをとる様子

NPO法人しが盲ろう者友の会

事務局長 黒川 早苗さん

「見えない・聞こえないから何もできない」ではなく、ほんの少しの支援があれば、みんなと同じように楽しめます。それは、聞こえる人も全てのことはできないのと同じです。盲ろうの人とフラダンスの練習をしますが、誰かに「困ることはないですか」と聞かれても、「ない」と答えます。一緒に楽しむためのフォローは、フォローではなく「当たり前」だから。どうすれば一緒に練習できるかを考えているだけなのです。これからは、お互いにできないことをフォローし合ってみんなが生活できる社会になってほしいです。盲ろう者を交えて話をする場も大切です。笑ったり怒ったりされますが、人間なので当然です。意見を出し合うことが重要だと思います。また、盲ろう者は、一人だと外出できません。災害があっても、避難できないのです。非常時は、そこにいるとわかれば、ドアを開けて肩を叩き、「行こう」と連れ出してほしい。そういうことができる地域が増えることを願っています。

NPO法人しが盲ろう者友の会 理事長 岡田 昌也さん

視覚と聴覚に障害があり、友の会の活動をしながら事業所で働いています。1歳の時に高熱で聴力が失われ、小学3年生の時に視力が低下しはじめました。小学4年生の時に手術をしました。たが視力は回復しませんでした。小学生の時は文字が読めていて、40歳ぐらいまではテレビも見えていました。50歳を過ぎた今は全く見えず、明るさがわかる程度です。

高校卒業後に就職しようとする、多くの会社から断られました。入社が決まった会社も、家族の同行が条件でした。同僚は聞こえる人ばかりでコミュニケーションが上手く取れず、ストレスを感じる日々でした。15年間同行してくれていた母親が、体を壊して同行できなくなり、私も会社を辞めざるを得なくなりました。母はその後亡くなりました。

退職後は自宅にいましたが、本当は仕事をしたかったです。孤独も感じる中で、友人の誘いで参加したろうあ協会の活動が楽しみでした。盲ろう者友の会が設立されると知って準備

会に参加し、友の会のメンバーの紹介で福祉事業所に入りました。その後事業所が拡大移転し現在は週に2、3回通所し、友の会の活動と両立しています。

4人家族で、今は父親と弟夫婦と一緒に暮らしています。母がいた頃は手のひらに文字を書いてやりとりでき、安心感がありました。母が亡くなってからは大変です。弟たちとはある程度意思疎通できるけれど、父は高齢でコミュニケーションが取りにくく、お世話が必要です。友の会は、県内に一つだけの組織で盲ろう者の理解を広げる活動などに取り組んでいます。各市町には組織がないのが少し不安です。災害時は、電気やガスが止まり、東日本大震災では、情報がなく大変だったと聞きました。そんな時は各市町にサポートをお願いしたいです。

友の会は他に、滋賀県盲ろう者支援センターとして県の委託を受け、生活訓練、通訳・介助者派遣等の六事業をしています。コロナ禍を境に人数の制限をしなくてはならなくなりましたが、以前はみんなで味噌汁

を調理したり、外出やゲームをしたりしていました。

他府県の盲ろう者との交流の機会もあり、多くの人と出会って活動した時間は、本当に貴重でした。今は交流の機会も減り、会えないのでメールでやりとりしますが、それほど面白くない、やはり実際に会って触手話で話したい。以前のように交流できるよう、今はまた少しずつ活動を始めています。

盲ろう者も、見えて聞こえる人も、みんな同じ人間です。けれど、社会から排除されていると感じることがあります。例えば県立琵琶湖博物館は、触ることができず、イメージできない。趣味の木工の材料を買いに行っても、袋に入っていると、店の人に開封をお願いして触らせてもらわなければならない。「触れない」ということは、盲ろう者にとって差別に思えるのです。

就職のときも、家族に負担を求めるより、会社として理解しようとしてほしかった。「問題がある」と困ります」ではなく「お互いに協力しよう」という姿勢が必要かと思っています。

皆と同じようにスマートフォンが使えないことも残念です。外出時に情報を得ることができません。病院や災害時の避難所などには通訳者を置いてほしいと思います。

ただ、私たちも誰かの役に立てることがあります。病院に入院した時、手話のできる看護師さんが手伝ってくれて、私は手話を教え、お互いに楽しく過ごしました。滋賀県警察本部に講演に行った時も、「いい話が聞けた」と言ってもらえました。

地域でも、手話教室など出前講座をして、触手話や手のひら書きを教えることはできます。視覚障害者やろう者の福祉は歴史が長く、進んでいます。一方で、盲ろう者の福祉は遅れています。その福祉を進めるためには皆さんの理解が必要です。私たちの思いを知ってほしい。そして、「助けてあげよう」という気持ちではなく、まず同じ人間として交流できたらいいなと思います。

NPO法人 しが盲ろう者友の会

滋賀県内の盲ろう者とその家族が支援者と共に交流の輪を広げ、盲ろう者の福祉向上をめざしています。盲ろう者の自立と社会参加の促進に関する事業を行い、全ての盲ろう者に支援の輪があることを伝えたいとの思いから、盲ろう者の方を探す活動もしています。



滋賀県の福祉に関わる人たちがさまざまな角度から今日的課題を掘り下げ、議論を深める研究会「フォーラムひたすらなるつながり」が、2023年6月に発足しました。福祉活動家の渡邊光春主宰と6人の運営委員が毎月1回の例会に集まり、日頃、現場で感じている当事者や支援者の課題やニーズを持ち寄って、行政の担当者やゲストの専門家らを交えながら問題意識を共有しています。

制度があっても、制度そのものが対象を狭めていたり、制度を利用することなど思いつかなくなったりする人もいます。法や制度の間にある生活課題を「見える化」し、地域の出来事として捉え、広く発信したいという思いでスタートした当フォーラム。将来的には政策提言につなげられるようなシンクタンク機能をもった組織に育てるべく、活動していきます。



金子 秀明

社会福祉法人 さわらび福祉会 理事長

ひきこもり当事者とともに過ごす時間は、『仕事』ではなく『寄り添い』である。



小坂 綾子

フリーライター／元京都新聞記者

個人の出来事を社会の問題に。福祉の問題を『自分ごと』に。



谷口 郁美

滋賀県社会福祉協議会 副会長

新しい問題ばかりでなく、見えにくい貧困、見えにくい社会的孤立を見つめたい。



中島 円実

滋賀県地域養護推進協議会 事務局長
つながり若者センター 統括コーディネーター

子ども・若者と社会・地域がつながりのなかで互いに育ちあうしくみづくりを。



丸山 英明

社会福祉法人 びわこ学園常務理事
元滋賀県社会福祉協議会副会長

専門家の支えと、専門家でない人の支え。どちらもあって福祉は充実する。



メンバー Member



渡邊 光春

福祉活動家

制度から問題を見るとこぼれ落ちる人がいる。潜在化している問題を顕在化させる。



山田 宗寛

社会福祉法人 小鳩会
「小鳩の家」施設長

当事者の本当の願いにアプローチしたい。子どもの自殺をなくしたい。

〈主宰〉

〈事務局長〉

〈事務局〉

滋賀県社会福祉協議会
COZYTOWN

☎ 0749-21-6200

✉ cozy@shigashakyo.or.jp

ご意見などお寄せください。

フォーラムひたすらなるつながりからの問題提起

福祉の出来事を地域の出来事に

「人間的なつながり」についての考察。それが、「フォーラムひたすらなるつながり」運営委員への、最初の課題だった。

フォーラム発足にあたり、私たちは、気になっている福祉の問題を持ち寄った。今、どんな取り組みが必要なのか。どのような視点で、どこから出発すれば、現代社会に漂う閉塞感を打破し、滋賀の福祉の向上につなげることができるのかを探るためだ。

津久井やまゆり園での障害者殺傷事件に見られるような命をめぐる優生思想、ひきこもり当事者の孤立、児童虐待、育児不安、高齢者の貧困、外国にルーツをもつ人が抱える困難、疲弊する支援者や福祉人材不足、ケアを抱え込みSOSを出せない当事者家族……。考えるべきテーマは多岐にわたり、焦点が定まらない。そのような中で着目すべきキーワードとして出てきたのが、「社会的孤立」であり、それを防ぐための「人間的なつながり」であった。

福祉関係者にとっては、問い直すまでもない共通言語とも言えるかもしれない。だが掘り下げると、その言葉が持つ意味は単純ではなく、心に引っかかる。「人間的」にながるとは、具体的にどうすることか。答えは見つからないが、問い続けていくことの重要性を私たちは共有した。

人と人がつながるといふ現象は本来、極めて自然で、安心して生きるために必要不可欠なことである。だが現代では、その自然かつ必要な機会を持てない人が少なくない。仕事、立場や属性を超えて、人と人がつながることが、難しい時代になっていると言えまいか。「それはなぜか」と背景を考え続けることで、ヒントが見えてくるはずだ。

滋賀の福祉は、社会は、「人間的なつながり」のための出会いを、どれほど提供できているだろう。そのことを検証し、十分でないといえれば、できる道を拓く方法を見出さなければならない。生きるための根源

的な機会を生み出すには、今や、福祉の視点を越えた発信や働きかけ、フォローやルールが必要になってきていることを、再認識したい。

合言葉に「福祉の出来事を地域の出来事に」を掲げている。フォーラムでの探究を通じて、私たちは真のニーズを探り、道を拓く方法を考えたい。福祉の出来事を、地域の視点で見つめ、現場の課題と制度や政策を照らし合わせ、分野を超えて意見を交換する。その中で、問題の本質に迫りながら出口を見つけていこうと試みる。

運営委員に加え、行政や福祉関係者、当事者や家族、地域で生きる人、声なき声も含めた皆の声が集まることで、課題の解像度は上がり、地域が誰にとっても安心して生きられる場所になる。そうしてつくられる地域であれば、このメッセージを目にする全ての人が包摂されると信じている。



社会福祉法人 六匠会
地域密着型
特別養護老人ホーム 紬
施設長
松川 恵さん

声をかけあい、助け合いながら 暮らせる社会へ

今から20年前、私は三つ子の母親になりました。三つ子は小さく生まれたため出生後NICU(新生児特定集中治療室)に1ヶ月間入院しました。私が先に退院する時にNICUの看護師さんに「お母さん、しんどいと思うけど毎日赤ちゃんに会いに来てくださいね」と念をおされ、その後も毎日「明日も必ず来てくださいね」と声をかけてくださったおかげで私はなんとか毎日通い続けることができました。

その後も事あるごとに私はたくさんの声かけをしていただきました。もともと私はひとに手伝ってもらうことが苦手で極力助けてもらうことを避けるような生き方をしてきましたが、多胎児の育児は自分だけではどうにもならないことだらけでした。行き詰ってしまいどんなに扉を開けようとしても開かないと感ずることがよくありました。「開かない!」と焦っているときに「押してみた? ひいてみた? 手伝おうか?」と周りの方からたくさんの声かけをしていただきました。自分から「助けてほしい」と言えない私にいただいた心配りは大きな救いでした。子どもにまつわる悲しい報道をみて、お節介りかも…と危惧せずに声をかけてくれる人がいれば救えた子どもや家族がいたのではと考えさせられることがよくあります。



ふくし 福祉論壇 ろんだん

私たちは7年前から「フリースペース(※)」という活動で、「子どもが信頼できる大人と安心してのびのび過ごせる夜の団らんの居場所づくり」に取り組んでいます。時代を経てコミュニティのかたちは変わり、ネットを通して日本全国、世界各国からの意見を簡単に聞くことができるようになりました。その反面、身近なひとたちからの声かけは随分減ったように思います。フリースペースは昔ながらのご近所付き合いのような自然にできたコミュニティではなく、作られたコミュニティです。活動を始めたころは作られたコミュニティにできることは限られているのではないかと感じていましたが、声をかけ続けることでお母さんや子どもたちから「困った」「助けて」と言ってもらえるようになり、たくさんの「ありがとう」や笑顔をもらえるようになりました。

こども・子育て政策では「社会全体でこども・子育てを支えていくという意識を醸成」する必要があるとうたわれています。昔は地域で子どもを育てることはあたり前のことだったかもしれませんが、「意識を醸成する」と政策に掲げなければいけないほど社会が変化したことに改めて気づかされました。「意識の醸成」への第一歩は声かけではないかと思います。昔に比べて人間関係における距離の取り方も難しくなってきましたが、声をかけあい、助け合いながら暮らしていける社会になることを願っています。

※フリースペース
あたたかいご飯とお風呂がある地域の社会福祉施設を拠点に、子どもたちが安心して、信頼できる大人と過ごせる夜の居場所

令和6年度

<https://www.fukushihoken.co.jp>

ふくしの保険

検索

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償 ボランティア活動保険



新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が5類感染症に変更されたことに伴い、「特定感染症重点プラン」を廃止して2つのプランとします。

保険金額・年間保険料(1名あたり) 団体割引20%適用済/過去の損害率による割増適用

プラン		基本プラン	天災・地震補償プラン
保険金の種類			
ケガの補償	死亡保険金	1,040万円	
	後遺障害保険金	1,040万円(限度額)	
	入院保険金日額	6,500円	
	手術保険金	入院中の手術	65,000円
		外来の手術	32,500円
	通院保険金日額	4,000円	
	特定感染症	補償開始日から補償 ^(*)	
賠償責任の補償	地震・噴火・津波による死傷	×	○
	賠償責任保険金 (対人・対物共通)	5億円(限度額)	
年間保険料		350円	500円

*特定感染症についても10日間の免責期間がなくなり、補償開始日から補償対象となります。
なお、令和5年5月8日以降、新型コロナウイルス感染症は補償対象外となりました。

<重要>

- ◆ 基本プランでは地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。
- ◆ 年度途中でご加入される場合も上記の保険料となります。
- ◆ 中途脱退による保険料の返金はありません。
- ◆ 途中でボランティアの入替や、ご加入プランの変更はできません。
- ◆ ご加入は、お1人につきいずれかのプラン1口のみとなります。

ボランティア行事用保険 (傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

送迎サービス補償 (傷害保険)

福祉サービス総合補償 (傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

● このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事 保険会社〉 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL: 03(3349)5137
受付時間: 平日の9:00~17:00(土日・祝日、年末年始を除きます。)
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL: 03(3581)4667
受付時間: 平日の9:30~17:30(土日・祝日、年末年始を除きます。)

〈SJ23-11315より抜粋〉